

二三日目のデイハイクを終えて

経済学部助教授 渋井康弘

四月二十七日(土)に実施されたデイハイクは、数名のリタイアが出たものの、大きな事故もなく無事終了した。デイハイクは今年で三回目。まだ十分に練り上げられた企画とはなっていないが、これまでの足跡を辿りながら、その意味と今後のあり方を探ってみよう。

(1) 学部行事としての企画成立

「新入生と教員が一緒に長距離を歩く」というデイハイクの企画が、商学部教授会で提案されたのは約三年前。経済学部・経営学部への分離・改組の準備が大詰めを迎えていた頃であった。新学部設立を機に、新入生歓迎の気持ちを何らかの行事の形にしたいとの考えから、今西先生(現・経済学部)をはじめとする数名の教員が発案したのである。名城大学としては前代未聞の行事であり、提案がなされた当初は戸惑いの声も少なくなかった。一般には歓迎行事といえば飲み食いをするパーティーと相場が決まっている。「新入生と歩く」というのがどうして歓迎行事なのか、「歩くこと」にどういう意味があるのかといった疑問が出されたのも、不思議ではなかった。

だが、「学生と一緒に何かを達成することで、歓迎の意を伝えよう」という趣旨をもつデイハイクは、単なる食事会の開催よりも意味のあるアイディアだと私には思われた。学生に名城大学への入学を実感してもらおうという点でも、学生と教員の、あるいは学生相互のコミュニケーションを図るという点でも、これは良いきっかけになるだろう。これを有志の教員によるウォランティア活動としてではなく、学部行事として開催することで、学生と共に良い学部づくりを進めようという私達の意志も伝えられるのではないか。

また「地域との連携」という点でも、この企画は意味のあるものと思われた。新学部が設立されていく過程で、私達は「地域」に目を据えることを、これまで以上に重視する方針を掲げてきた。二〇〇〇年春における地域産業集積研究所の設立、経済学部産業社会学科における地域・環境コースの設置も、その基礎にはそうした考え方が貫かれていたのである。地域に視点をおいた研究・教育を推進し、学生と共に地域に根ざした大学作りを進めることで、地域から信頼される大学・学部になっていきたい。その思いがなければ、このような形で新学部が設立されることはなかっただろう。

そしてデイハイクは、私達のそうした思いにまさにフィットする企画と思われた。名城大学に入学した学生が、周辺の市や町を歩き回ること、地域のありようを実感する。これは地域研究の第一歩ともいえる活動である。もちろんそれだけで地域がわかるわけではない。だが、明らかに重要な第一歩である。文献や地図だけで知識を得るのではなく、また自動車で通り過

ぎるのではなく、とにかく歩いて体感する。その中で、地域の人達と触れ合うチャンスがあればもっと良い。そういう機会を入学早々に準備できれば、これは学部行事にふさわしい企画となるに違いない。

こうした思いから、私はこのアイディアの実現に大いに期待を寄せた。企画の趣旨に関しては、必ずしも教員間でびたりと意見がまとまったわけではなかった。だが実施に関しては、概ね積極的な意義が認められたのであろう。教授会は、(新設される経済学部・経営学部)学部行事として実施することを決定したのである。

(2) 実施にこぎつけるまで

こうして学部行事としての実施が決まったわけだが、二〇〇〇年四月の第一回開催に至るまでの準備・段取りは、実に手間のかかるものであった。ただし、私自身はその準備には全く協力していない。面倒な段取りのほとんどは、体育関係の教員が手配したのだ。学部行事とすることに賛成しておきながら、面倒な仕事はその先生方にお任せしてしまったわけで、この点、反省すべきと思っている。

そういうわけで、あくまでも傍から見ているの感想なのだが、準備作業は苦難の連続だったと思う。

何よりもまず、歩くコースの選定をせねばならない。農学部の施設である春日井の農場から天白校舎まで、「約三十kmを歩ききろう」と決めたのは良いが、さてどのルートを使ったものか。ゆつたりと歩いて、交通の危険の少ない、無理な横断などのな

いコースを探さねばならない。

結局これは、いくつかのコースを歩いてみなければわからない。約三十kmの道のりを何度も歩くというこの最初の試練は、全て体育関係の教員が引き受けた。実は学部行事としての正式決定以前から、何度も歩いてコースを検討していたのである。春日井から天白まで、ひとりで三十kmを歩いて帰って来て、資料室でぐったりしていた今西先生の姿を、今でもはつきりと覚えていいる。

その後の諸々の面倒な作業は、数えあげられるだけでも気が遠くなりそう。農場集合の際の最寄駅である春日井駅への連絡、春日井駅から農場までの学生移動用バスのチャーター、警察への届出、昼食用の弁当の手配、参加者に配るTシャツの手配、体調の悪い学生に対応するためのドクター、ナースの手配、天白到着後の食事の手配、パンフレットの作成、学生のグループ分け、到着グループを歓迎する音楽演奏(音楽サークルによる)の手配、雨が降った場合の対応の検討、ラジオ放送による雨天中止の連絡の手配、等々……そしてこれらの予算のやりくり。ほとんどが体育関係の教員によって準備された。

(3) 第一回デイハイクの実施

これら大小様々な準備の後、「雨天中止になったら……」との心配をよそに、第一回目のデイハイクは二〇〇〇年四月二十八日、晴天の下で実施された。当日の朝、学生・教職員ともども春日井農場に集合し、それぞれ弁当とTシャツを手に天白に向けて歩き始めた。五百人を越える人間の大幅動である。富岡先生経

営学部)が案内者兼ベースメーカーとして先頭を行き、横野先生(経営学部)、今西先生がバイク、自動車で伴走。歩行のペー
スや道路横断のタイミングなどをコントロールした。またラグ
ビー部、アメフト部、柔道部の上級生諸君が、五、一〇人に編
成された新入生のグループのリーダーとして、一人ずつ各グ
ループを担当し、その面倒を見てくれた。コースのポイントと
なる地点に立って、行き先を指示してくれた野球部員もいる。
女子駅伝部員のように、ゴールとなる天白校地で、食事の準備
をしてくれた人達もいた。これら運動部の上級生の協力がなけ
れば、第一回のデイハイクは大混乱していたことだろう。

準備作業には関わらなかった私も、ウォーキングには参加し
た。三十kmという距離に不安もあったが、小幡緑地公園で昼食
をはさみ、意外と快調に歩き進むことができた。もちろん相当
な疲労は感じたが、天白校舎のグリーンパークで準備された豚
汁を食べながら、いつになく充実感を味わったものである。私
よりも年配の教員も次々とゴールして来たことから、そう無理
なコースではなかったと判断して良いだろう(七十歳を過ぎた
経営学部 斎藤先生がゴールされた時にはさすがに感動した)。

(4)二回目そして三回目

初年度の経験を踏まえて、デイハイクは二年目、三年目と、
基本的には同じコースで継続されてきた。

二回目のデイハイクは二〇〇一年四月二十八日、快晴の天候
の下で実施された。前年の経験があったとはいえ、準備に大変
な労力を要したことは明らかであった。またもや体育関係の教

員が、負担の多くを引き受けた。

この年はいくつかのゼミナールの二年生が、運動部の上級生
と共に、グループリーダーとしての役割を果たしてくれた。さ
ほど多くの人数ではなかったが、新一年生のために働こうと考
えてくれるゼミ生が現れたことを、私はとても嬉しく思った。

また、前年度は天白校地での食事の後、ゴミが散乱し、教員
が片付けて回らねばならなかったのだが、二年目には分別収集
の徹底を呼びかけていたこともあり、ゴミ回収に伴う混乱は少
なくなっていた。回収の際にリーダーシップを発揮してくれる
学生達も現れ、これも大きな成果だったと思っている。

そして今年が三回目。天白校地が工事中のため、今回のゴー
ル地点は野球場へと移動。到着後はグループごとにパーベ
キューを囲めるように、準備がなされた。これによって各グル
ープのコミュニケーションは、前の二回よりも格段に深まったよ
うだ。また、自ら歩く地域への理解をさらに深めてもらえるよ
うに、グループごとにカラー刷りの地図を配布し、ゴール後には
地域に関するクイズを十数題用意した。クイズの作成には私
も関わった。デイハイクの準備に関して、私が携わった唯一の
ものだ。グループごとに競う形のクイズにして、優秀チームに
はささやかな景品も用意した。これも仲間との交流に一役かつ
たのではないかと思っている。

教職員の方も、今回新たな顔ぶれがウォーキングに加わった。
こうして三回目のデイハイクは、従来の経験を基礎に、ゲー
ムの要素を加味されながら無事に終了した。もちろん今回も、
体育関係の教員やラグビー部、女子駅伝部などの上級生がいな

ければ、決して成立しえないものであった。だが食事の準備、Tシャツや景品の選定、クイズの作成、ビデオの撮影などに、より多くの教員が関わるようになったことで、少しばかり学部行事らしくなってきたようにも思われた。

(5) 歩き続けてみよう

こうして三回を無事に終えたデイハイクだが、経験した学生達ほどのように思っているのだろうか。感想が書かれたカードを見てみると、「とても充実していた」「友達ができて良かった」「疲れたけれど、良い思い出になった」といった意見がある一方で、「全然楽しくなかった」「二度とやりたくない」「つらいだけだった」といった言葉を、吐き捨てるように書いている学生もかなりいる。しかし私は、後者のような感想を持つ学生がいても、それはそれで良いじゃないかと思っている。私達は、何もいたれり尽くせりのサービスをして、一日中、面白おかしく楽しんでやらおうと思っているわけではない。そもそも私達の仕事である「教育」というものは、受けたその場ですぐに「楽しい」と感じられるものでないことの方が、圧倒的に多いのだ。学生からは「言われたくない」「聞きたくない」「したくない」と思われるようなことでも、彼・彼女らの将来の糧になると信じて話し、聞かせ、経験させなければならぬ。その場ですぐに喜んでもらったり、楽しんでもらったりすることばかりを期待すべきではないし、もしそれを目指すようになったら大学教育は崩壊するだろう。テーマ・パークを運営しているわけではないのだから。

「二度とやりたくない」「つらいだけだった」という思いであろうとも、それは参加して、三十kmを歩いてみたからこそ実感できたのだ。彼・彼女らは、今後、そのつらく苦しい思い出とともに、名城大学への入学のことを思い出すことだろう。そんな思い出でも、何も無いよりはずっと良いではないか。

何の苦もなく即座に楽しめた経験は、大抵あつという間に記憶から消えてしまう。その種の経験をさせるために、こんな大がかりな企画が立てられたわけではないのだ。

もちろん、企画としての未熟さは随所に見られるし、段取りのスムーズでない部分も残っている。しかしそれらの多くは、教員間で仕事をうまく分担する体制を作っていけば、解決する問題だと思っている。最初から完璧であることを求めていたら、新しい事は何も始められないだろう。

ともかくにもこの新しい新入生歓迎行事が、学部行事として三回続けられた。教員がこのような形で関わる行事は、他大ではほとんど見られないと思う。他大にはないことを企画・運営して「すばらしい」と思うか、それとも「ばからしい」と思うか：。

すくなくとも私は、この行事が続いていって欲しいと思っている。企画として未熟な部分については、上級生が改善案を出して、運営に協力してくれないだろうか。学生と共に年々内容を充実させて行き、やがてそれが世間周知の恒例行事になっていったら……そう考えるだけでわくわくしてくるのは、私だけだろうか。上級生が毎年あらたな工夫を凝らし、新入生は入学



〈2002年4月27日の風景〉
楽しくても、つらくても、とにかく
君達は30km歩いたのです。

前から期待と不安をもってこの行事のことを思い、地域の人たちは毎年四月の終わりが近づくに「そろそろ名城の学生が歩く頃だよ」と言いつつ、その見物を楽しみにする。そんな風になつていくことを期待しつつ、私も体力が続く限り、毎年歩いて行きたいと思っている。

(工業経済論)